

『日本靈異記』における仏法

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2017-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 斎藤, 真希 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009985

『日本靈異記』における仏法

斎藤真希

序

本論文の目的は『日本靈異記』を題材とし、日本の仏教の一側面を明らかにすることである。『日本靈異記』は、日本古代に記された仏教説話集としてよく知られるものであり、その説話のなかでは、当時の人々の日常生活を舞台にした様々な不思議な出来事が語られる。

この『日本靈異記』は、古代の歴史的状況を論ずるための手がかりとして注目され、また、文学作品として評価され、あるいは、国内外の説話と共通のモチーフを豊富に含む文献として研究されてきた。『日本靈異記』が含む内容は多様であるから、そこから読み取り明らかにし得る事柄も、多様であると言えるだろう。

そのような『日本靈異記』が含む内容のなかでも、本論文が試みるのは、『日本靈異記』の各説話が表現する仏教のありようを解明するということである。

「善悪の状呈すにあらずは、何を以てか、曲執を直して是非を定めむ。因果の報を示すにあらずは、何に由りてか、悪心を改めて善道を修めむ」（『靈異記上』30頁）

と述べられているように、『日本靈異記』のテーマになっているのは、因果応報の道理である。因果応報とは具体的には、善因善果、悪因悪果をいう。善い行為を行うと善い結果が得られる。悪い行為を行うと悪い結果を得ることになる。『日本靈異記』によれば、人間をはじめ生き物の運命は善因善果、悪因悪果の法則によって支配されている。

そして、善因を行った者が善果を得、悪因を行った者が悪果を得るということは、現にこの日本でも起こっている。そうした事実を収集し、示すことによって、因果応報の道理が真実であることを人々に信じさせ、善へと赴かせる。このことが『日本靈異記』の目指すところである。

ところで、『日本靈異記』における善行と悪行は、現在の常識とは異なった特殊な意味合いを持っている。簡単に言えば、仏法を信じるか否かということが、『日本靈異記』における善行と悪行の基準である¹。仏法は仏菩薩、經典、戒律や行、僧などの形で『日本靈異記』のなかに登場する。

これら仏菩薩に対して祈願、称名、供養を行い、經典の書写、読誦を行い、仏が教える通りに持戒し、布施、忍辱などの行をおこなうことが、仏法を信じるということの具体的なあり方である。これらの善行を行うことによって、現世や来世の幸福、すなわち善果がもたらされる。善果とは具体的には、富貴を得ること、長寿を得ること、災難から救われること、病が癒えること、極楽浄土への往生などである。

これに対して、仏菩薩の像や仏塔を破壊し、經典を敬わず、仏が戒める殺生、偷盜、邪淫、不孝、不正な取引などを行い、仏法に帰依する僧を迫害することが、仏法を信じないということの具体的なあり方である。これらの悪行を行うことによって、現世や来世における苦難、すなわち悪果がもたらされる。変死、重病、災難、労働に苛まれる牛への転生、地獄での責め苦などが、悪果の例である。

このように、仏法を信じるのなら幸福がもたらされ、仏法を信じないのならば苦難がもたらされる。仏法が要となって因果応報の法則が働いている。それでは、このような仏法とは『日本靈異記』の中でどのようなものと考えられているのだろうか。以下に検討してみよう。

1、仏菩薩

『日本靈異記』のなかには、仏菩薩にまつわる説話が数多く収められている。これらのうちで目を引くのは、仏像に起こった異常な出来事を物語る一群の話である。例えば、中巻第二十三「弥勒菩薩の銅像の盗人に捕られて、靈しき表を示し、盗人を顕しし縁」は次のような話である。勅使が夜に巡回していると、「痛きかな、痛きかな」(『靈異記中』²177頁)と泣き叫ぶ声が聞こえる。そこで駆けつけてみると、盗人が盗品の弥勒菩薩の銅像を打ち壊しているところであった。泣き叫ぶ声は弥勒菩薩の銅像が発していたのである。

¹ 白土わか 「日本靈異記にあらわれた因果応報思想」(仏教思想研究会編『仏教思想3 因果』1982年 平楽寺書店 325-326頁)

² 中田祝夫訳注 『日本靈異記(中)』2013年 講談社学術文庫、以下同様に記載する。

これと同様に、中巻第二十二「仏の銅像の盗人に捕られて、霊しき表を示し、盗人を跼しし縁」では、盗まれて壊されていた仏像が泣き叫ぶ声をあげる。あるいは、中巻第二十六「未だ仏像を作り畢へずして棄てたる木の、異霊しき表を示しし縁」では、彫りかけの仏像が人や獣に踏まれて「嗚呼、痛く躓むこと莫れ」（『靈異記中』196頁）という。中巻第三十九「薬師仏の木像の、水に流れ沙に埋れて、霊しき表を示しし縁」では、水底に沈んだ薬師仏の木像が、「我を取れ、我を取れ」（『靈異記中』259頁）と声をだす。下巻第二十八「弥勒の丈六の仏像の、其の頸を蟻に嚼まれて、奇異しき表を示しし縁」では、弥勒菩薩の像が首を蟻に噛み砕かれて、うめき声をあげる。

この他にも、中巻第十七「観音の銅像と鷲の形と、奇しき表を示しし縁」では、池に沈んだ観音菩薩の像のありかが、不思議な鷲によって示される。中巻第三十六「観音の木像の神力を示しし縁」では、観音菩薩の像の首がひとりでに切れ落ち、翌日には自然に元通りになっていたばかりか、光を放っていた。中巻第三十七「観音の木像の火難に焼けずして、威神の力を示しし縁」では、観音菩薩の像がひとりでに火事から逃れ出た様子が語られる。

以上が仏像にまつわる不思議を語った一連の説話である。ところで、これらの説話では共通して、不思議の原因を聖霊、あるいは法身と呼ばれるものの存在に求めている³。

「木は是れ心無し、何にして声を出さむ。唯し聖霊の示したまへらくのみ。更に疑ふべからず」（『靈異記中』197頁）

とあるように、木に心はないのだから、人や獣に踏まれたからといって、本来ならば声を出すはずがない。にもかかわらず、彫りかけの仏像が声を出したことは不思議な出来事であるが、それは聖霊の仕業だというのである。

この聖霊は、『日本靈異記』の別の部分では「理智の法身」、「理の法身」などとも呼ばれている。理とは空の思想に表されるような真理のことを示し、智はその真理と合一した智慧を意味し、法身とは仏の身体のうちの一つを指す。つまり「理智の法身」あるいは「理の法身」とは、真理そのものと一体である常住不変の仏を指す。

例えば、仏教の開祖として知られる釈迦は、誕生から入滅までその生涯が伝えられている。このような釈迦は、変化を免れない肉体を持った仏であると言

³ 八重樫直比古 「『日本靈異記』における「聖霊」の観念」（『ノートルダム清心女子大学紀要 文化学編2（1）』1978年 ノートルダム清心女子大学 1-16頁）

える。だが、仏教徒の間で仏の身体についての考察が重ねられた結果、真理そのものとしての常住不変の法身こそ、仏の本体であると考えられるようになった。このような考え方に従えば、釈迦の本体は法身であり、生まれ老い死ぬ肉体を持つ仏は、法身が衆生の教化のために現した仮の姿であることになる。

『日本靈異記』においても、仏の本体である常住不変の法身の存在が認められている。ただし、『日本靈異記』では、法身と関わる真理や智慧といった教説については、「理」「理智」などの言葉が登場する以外に言及されることはない。『日本靈異記』において、何よりも重視される仏菩薩の属性とは、それが超常的な威力を持っているということ、およびその力によって、現に不思議を引き起こす当体であるということである。そのことについては、例えば、

「誠に知る、三宝の非色非心は、目に見えずと雖も、威力无きに非ぬことを」
（『靈異記中』255頁）

と述べられている。法身は物質的な肉体を持つものではないから、目で見ることではできない。しかし、超常的な威力を持った存在として、現に活動している。そして、こうした法身の超常的な威力こそが、説話の中で語られる様々な不思議を引き起こす原因なのである。

では、なぜ法身は仏像に声を出させるなどの不思議な現象を起こすのだろうか。このことについて『日本靈異記』では以下のように解釈する。

「夫れ理の法身の仏は、血肉の身に非ず。何ぞ痛む所有らむ。唯し常住不変を示したまふ所以のみなり」（『靈異記中』177頁）

「誠に知る、理智の法身、常住无きに非ず。不信の衆生に知らしめむが為に示したまひし所なりといふことを」（『靈異記中』253頁）

『日本靈異記』のなかには仏菩薩の像が傷つけられて、泣き叫んだり、うめき声をあげるという話があった。しかし、法身は人間のように血肉を持った存在ではないのだから、仏像を壊されたとしても痛みを感じるはずがない。だから、壊されながら「痛きかな、痛きかな」などと声を発するのは、痛みを訴えることが目的ではないのだ。法身はそのような不思議によって、自己が常住不変であり、現に存在しているということを、人々に示そうとしているのである。

先にも述べたとおり、法身は人間のような肉体を持つ存在ではないから、目で見ることではできない。だから、人間にはもともとその存在を確かめる術はないのである。しかし、法身は超常的な力を持っていて、時にその力を発揮し、仏菩薩の像などに不思議な現象を引き起こす。そのような現象によってこそ、人々は法身の存在を知り、信心を起こすことができるのだと、『日本靈異記』で

は考えられている。

したがって、仏菩薩の像にまつわる不思議が、『日本霊異記』に書き記されている理由とは他でもない。仏菩薩の像が起こす不思議を語ることによって、それを引き起こす威力のある仏や菩薩の法身の存在を人々に実感させ、信じさせようとしているのである。

2、化身

仏菩薩は別の場合には、隠身、あるいは反化などと呼ばれる形をとって人々の前に現れることもある。隠身、反化とは仏や菩薩の化身のことで、仏菩薩が仮に人間になって人々のところに現れてきた姿をいう。『日本霊異記』には幾人かの化身が登場するが、その例としては、聖徳太子、行基、円勢、猿の聖などの人物を挙げることができる。

『日本霊異記』においては、自ら仏法を実践し、仏法を人々に広めた功績のあるこれらの人々が、仏菩薩の化身であると考えられている。例えば聖徳太子と行基に関しては、上巻第五「三宝を信敬したてまつりて現報を得し縁」という話が存在する。この話のなかには、大部屋栖野古という人物が仮死状態になって、極楽国へ行くというくだりがある。ここで大部屋栖野古は死んだ聖徳太子に出会い、聖徳太子とともに文殊菩薩のもとに赴くのだが、その後に聖徳太子は次のように大部屋栖野古に告げている。

「速やかに家に還りて、仏を作る処を除へ。我悔過し畢らば、宮に還りて作らむ」(『霊異記上』⁴75頁)

この聖徳太子の言葉について、『日本霊異記』では、

「宮に還り、仏を作らむと者へるは、勝宝応真聖武大上天皇の日本の国に生まれたまひ、寺を作り、仏を作りたまふなりけり。爾の時に並に住む行基大徳は、文殊師利菩薩の反化なりけり。是れ奇異しき事なり」(『霊異記上』76頁)

という注釈がなされている。つまり、聖徳太子が「宮に帰って仏を作ろう」と言ったのは、未来に聖武天皇として日本に生まれてきて、寺を作り、仏を作ることを宣言したというのである。そして、その際に聖武天皇とともに活動する行基は文殊菩薩の化身であるという。

このように『日本霊異記』では、聖徳太子や行基は普通の人間ではなく、仏

⁴ 中田祝夫訳注 『日本霊異記(上)』2013年 講談社学術文庫、以下同様に記載する。

法興隆という目的のために、人間として生まれてくる仏菩薩であると考えられている。仏菩薩は目に見えない存在であるのだが、人間に対して働きかけを行う。先の章で論じた説話にあるように、仏像に超常的な現象を起こし、自己の存在を知らしめるというのもその一つである。

この話の場合には、仏菩薩は人間の姿になって人間のなかに生まれてきている。そのような人物こそ聖徳太子や行基であるのだから、彼らの活動は人間の世界における仏菩薩の活動に他ならない。それでは聖徳太子や行基の活動は、『日本靈異記』においてどのように語られているのだろうか。

聖徳太子や行基など、仏菩薩の化身とされる人々が行うことは、当然のことながら自ら仏法を実践するとともに、世の中に仏法を広めるということである。そのような彼らの活動について、『日本靈異記』では、

「進止威儀僧に似て行ひ、加のみならず勝鬘法花等の經の疏を製り、法を弘め物を利し、孝績功勳の階を定めたまふ。故に、聖徳と曰す」(『靈異記上』58頁)
「俗を捨て欲を離れ、法を弘め迷を化す」(『靈異記中』76頁)

などと語られている。しかし実のところ、『日本靈異記』の説話の核心となっているのは、仏菩薩の化身とされる人々が行ったとされる、上記のような仏教活動の具体的様相ではない。『日本靈異記』において、それよりもなお一層重要であるのは、彼らが超常的な力を持ち、それを発揮したということである。

例えば、聖徳太子に関する話に、上巻第四「聖徳太子の異しき表を示したまひし縁」という話がある。この話の筋は次のとおりである。ある日、聖徳太子が道端で病んだ乞食に出会い、衣のやり取りをする。後日、乞食が死んでいたので埋葬し、人をやって墓のなかを確かめてみると、乞食の姿は消え失せていた。この乞食は実は仏菩薩の化身だったのである。

聖徳太子と乞食にまつわる以上の話の主題は、

「誠に知る、聖人は聖を知り、凡人は知らず。凡夫の肉眼には賤しき人と見え、聖人の通眼には隠身と見ゆと。斯れ奇しく異しき異なり」(『靈異記上』59頁)

という一文に表現されていると言えよう。聖徳太子以外の人々の目に、乞食は単に賤しい人としか見えなかった。だが、聖徳太子のみがその正体を見抜き、仏菩薩の化身であることを知っていた。なぜならば、聖徳太子もまた仏菩薩の化身であり、物事を見抜く通眼、つまりは超常的な力を持っていたからである。

次に、行基の活動を語る話として、中巻第二十九「行基大徳の、天眼を放ち、女人の頭に猪の油を塗れるを視て、呵責せし縁」というものがある。この話に

よると、ある時、行基が説法していると、その場に髪に猪の油を塗った女がいた。行基はこの女を見て、

「彼の頭に血を蒙れる女は、遠く引き棄てよ」(『靈異記中』214頁)

と言い、説法の間から女を追い出してしまった。このような行基の行動を、『日本靈異記』は以下のように説明する。

「凡夫の肉眼には是れ油の色なりといへども、聖人の明眼には、見に突の血と視たまふ。日本の国に於ては、是れ化身の聖なり。隱身の聖なり」(『靈異記中』214-215頁)

普通の人の目には、女が髪に塗っていたものは単に油と見えていた。しかし、行基の常人を超えた目には、それが猪を殺して得た油であることが明らかだった。それゆえに、行基には女の頭に猪の血が塗られている様がありありと見えていたのである。

行基はこの話の他、中巻第七「智者の變化の聖人を誹り妬みて、現に閻羅の闕に至り、地獄の苦を受けし縁」においては、他者の心を読む力を發揮している。あるいは、中巻第三十「行基大徳、子を携ふる女人の過去の怨を視て、淵に投げしめ、異しき表を示しし縁」では、説法を聞きにきた女性とその子供の前世を見抜いている。

このように『日本靈異記』では、行基は聖徳太子と同様に、普通の人には知り得ない物事の本質を見抜く力を持つとされている。なぜならば、行基もまた普通の人間ではなく、人間として仮に現れてきた仏菩薩であるからだ。

以上のように、仏菩薩の化身にまつわる『日本靈異記』の説話のほとんどは、仏菩薩の化身とされる人物が發揮した超常的な力に眼目を置くものであると言える。つまり、聖徳太子や行基が仏菩薩の化身であり、彼らの活動が仏菩薩の活動であるということは、彼らが超常的な力を發揮し、不思議をあらわすことによって証明されている。

なぜならば、上で述べたように、『日本靈異記』において、仏菩薩とはまず何よりも、超常的な力を持ち、不思議な現象をあらわす存在であったからだ。したがって、仏菩薩の化身の行状もまた、超常的な力を發揮する活動として描かれねばならないのである。

3、経典

『日本靈異記』には仏菩薩とともに、様々な仏教経典が登場する。そのような

經典としては、『方広経』、『金剛般若経』、『般若心経』、『薬師経』、『観音三昧経』、『法華経』などを挙げるができる。『日本靈異記』では、これらの經典にまつわる不思議も盛んに語られている。

そのような説話の例としては、まず、上巻第十四「僧の心経を憶持し、現報を得て奇しき事を示しし縁」という話を挙げるができるだろう。この話によれば、ある晩に義覚という人が、部屋の中で『般若心経』を唱えていた。唱え終わって目をあけてみると、部屋の四方の壁が消え去り、外の庭の様子がはっきりと見えた。そればかりか、部屋の中から自在に外へ出て行くことができた。このような現象を『日本靈異記』の著者は、

「即ち是れ心波若経の不思議なり」(『靈異記上』115頁)

と解説する。つまり、部屋の四方の壁が消え去るという不思議な現象が起こったのは、義覚が唱えていた『般若心経』の超常的な力によるものだとするのである。

ここで登場する『般若心経』とは、空の思想を説くことを内容とする經典である。具体的には、この世の一切が空であり、何もかも実体的に捉えることはできないということを明らかにするとともに、そうした空の認識を正しく得ることによって、何ものにも囚われることのない心の自由な状態が実現されると述べている。

『日本靈異記』の上巻第十四「僧の心経を憶持し、現報を得て奇しき事を示しし縁」の筋は、このような『般若心経』の教説を反映して形成されたものだと考えることができるだろう⁵。つまり、義覚は『般若心経』の教説によって、何ものにも囚われず、妨げられることのない自由な状態を得た。そのような義覚の状態が、『日本靈異記』では、

「其の室の裏の四壁、穿け通り、庭の中頭に見えたり」(『靈異記上』115頁)

という不思議な現象として表われているのである。

ところで、『般若心経』の主題である、実体的な思考法から脱却し、物事に対する執着から解放された心の自由な状態それ自体は、直接的には超常的な威力とは関わりのない教説である。しかし、それにもかかわらず、『日本靈異記』では、『般若心経』の空の教説が、壁が消え失せて自在に移動する不思議と結び付けて表現されている。そして、そのような現象を語ることによって、『般若心経』の持つ超常的な威力を示すことが試みられている。

⁵ 中田祝夫訳注『日本靈異記(上)』2013年 講談社学術文庫 118頁

このように、『日本靈異記』において経典が扱われる場合、最も重視されているのは、その経典がいかに超常的な力を発揮したかということである。ここから、『日本靈異記』が経典をどのようなものとして見ているのか、その態度をうかがい知ることができるだろう。つまり、『日本靈異記』において、経典は仏菩薩と同様に、あくまでも超常的威力を持つ存在であって、不可思議な現象を引き起こす当体として重要なものである。

このような経典への見方は、『日本靈異記』の他の説話からも確認することが可能である。例えば、下巻第十「如法に写し奉りし法華經の火に焼けざりし縁」という話によると、ある人が写經の法式に従い、清浄を保って『法華經』を書写した。その後、火災が起こって家が燃えてしまったのだが、『法華經』を納めておいた箱だけは、燃え盛る火のなかにあっても少しも焼け損なわれることがなかった。箱を開けてみると、なかにある『法華經』は色も文字も鮮やかなまま無事であった。

「諒に知る、河東の練行の尼の、写せる如法經の功茲に顕れ、陳の時の王与の、經を讀みて火難を免れし力再示したりといふことを」（『靈異記下』⁶90頁）

という文に示されるように、ここでも『法華經』という経典は超常的な力を持つものと信じられている。そうした力にまつわる出来事として、中国の河東の尼が書写した『法華經』の文字が、尼にしか見えなかったという不思議な現象や、陳の時代の王与の娘が、經を讀んで火難を免れたという出来事が挙げられている。そうした力が日本においても発揮され、「如法に写し奉りし法華經の火に焼けざりし縁」で語られるような不思議を引き起こしたのであると、『日本靈異記』は説明している。

この他にも、中巻第六「誠心を至して法華經を写し奉り、驗有りて異しき事を示しし縁」では、『法華經』を納めるために作った箱が、不思議にも伸び縮みするという現象が起こる。また、下巻第一「法華經を憶持せし人の舌、曝りたる髑髏の中に著きて朽ちずありし縁」は、『法華經』を讀んでいた人が死に、髑髏になった後にもその舌が腐らず、『法華經』を讀み続けていたという異様な出来事を物語る。

「誠に知る、大乘不思議の力を示して、願主が至深の信心を試みたまへりといふことを。更に疑ふべからず。」（『靈異記中』72-73頁）

「諒に知る、大乘不思議の力にして、經を誦じ、功を積みし験徳なりといふこ

⁶ 中田祝夫訳注『日本靈異記（下）』2015年 講談社学術文庫、以下同様に記載する。

とを) (『靈異記下』35頁)

などと述べられているように、これらの説話はいずれも「大乘不思議の力」と呼ばれるような、經典の持つ超常的な力について語るものである。經典が超常的な力を持つものであるがゆえに、通常では考えられないような不思議な現象が引き起こされるのだと、『日本靈異記』では考えられている。

そして、『日本靈異記』において、以上のような經典の威力にまつわる説話が語られる理由は、

「是れ不信の人の心を改む能談なり」(『靈異記下』90頁)

という一文に示されていると考えられる。つまり、『日本靈異記』は、經典にまつわる不思議な現象を語ることによって、經典に代表されるような仏法が、現に不思議な威力を発揮していることを人々に知らしめようとしている。そのことによって、仏法を信じない人々の心を改め、仏法という威力あるものへの信心を起こさせようとしているのである。

4、仏法の特徴

総括するならば、『日本靈異記』において、仏法とは不思議を引き起こす超常的威力に集約されるものであると考えることができる⁷。もちろん、そのような仏法への見方は、必ずしも誤ったものとは言えない。仏や菩薩が常人の持たない超常的な力を発揮する存在であることや、經典が無量の功德を備えるものであることなどは、大乘仏教の思想においてはごく一般的に認められる考え方である。

しかしだからといって、仏法は本来、超常的威力への信仰のみに集約され得るものでもない。例えば、常住不変で超常的な力のある仏菩薩の存在は、空の思想に代表されるような、世界の真のありようを説く教説の裏付けを持っている。『日本靈異記』のなかにも登場する「理智の法身」という言葉からも、そうした教理的な背景を読み取ることは可能である。

あるいは、仏教の經典は、それぞれに独自の教説を表現するものである。そうした教説の目的は、単に仏法が超常的威力を発揮するという事実を示すことに尽きるものではない。そのことは、前述の『般若心経』で説かれる空の教説を見ても明らかである。

⁷ 入部正純『日本靈異記の思想』1988年 法蔵館 55-102頁

しかし、『日本靈異記』においては、こうした超常的威力と直接に関わりのない仏法の側面には、ほとんど関心が払われない。もしくは上巻第十四「僧の心経を憶持し、現報を得て奇しき事を示し縁」のなかに見られるように、関心を払った場合であったとしても、それは必ず超常的な威力に結び付けられて扱われる。

このように、『日本靈異記』において重要なのは、仏菩薩や經典に代表される仏法が超常的威力を持つということ、およびそのような威力が現に発揮され、不思議な現象が引き起こされているということである。『日本靈異記』では、仏教思想から超常的威力という側面を切り取ってくることで、仏法というものの全体像を描き出しているのである。

さて『日本靈異記』では、人々に対して盛んに仏法の信仰が勧められている。『日本靈異記』における仏法が、超常的威力に集約されるものであるとすれば、仏法を信じるということは、超常的な威力あるものを信じるということである。これはつまり、超常的な威力あるものと関わり、その威力に与ろうとすることを意味している。

『日本靈異記』において、このような関わり、つまり仏法を信じることは、具体的なくつかの行為によって実践されている。その代表的なものは、仏菩薩に対する祈願、称名、供養、また經典の書写、読誦、さらに經典に説かれる戒律や行（不殺生、不邪淫、孝行、布施、忍辱など）の実践である。『日本靈異記』においては、こうした行為の実践によって、仏法の威力を被ることが可能であると考えられている。次に、このような仏法信仰の具体的な様相について見ていこう。

5、仏法信仰の様相

『日本靈異記』における仏法信仰の説話にはいくつかの類型がある。まず、『日本靈異記』には、仏法の信仰によって貧窮から救われ、富を得るという展開の話がある。このような話の例としては、中巻第二十八「極めて窮れる女の、尺迦の丈六仏に福分を願ひ、奇しき表を示して、以て現に大福を得し縁」を挙げることができる。この話によれば、聖武天皇の時代に、生きていくのも困難であるような窮乏した女がいた。この女は、大安寺の釈迦仏の像が人々の願いをかなえてくれるという評判を聞き、

「唯し貧窮に依り、命を存くるに便無く、帰するところ無く、怙むところ無

し。故に、我是の寺の尺迦の丈六の仏に、花香燈を献じ、福分を願ひつらくのみ」(『靈異記中』210頁)

と決意する。女が月日を重ねて釈迦仏に花香燈の供物を捧げ、幸福を祈願し続けていると、ある日、女の家の前に大安寺所有の銭が置いてあった。そのことを知らされた大安寺の僧たちは不思議に思うが、釈迦仏が女に与えたのであろうと考え、女から銭を取り戻すことをしなかった。この銭を得たことをきっかけにして、女は豊かになり、長命を保つことができた。

この話と同様の筋を持つ『日本靈異記』の話には、中巻第十四「窮れる女王の吉祥天女の像に帰敬して、現報を得し縁」、中巻第三十四「孤の嬢女の、観音の銅像を憑り敬ひしときに、奇しき表を示して、現報を得し縁」、中巻第四十二「極めて窮れる女の、千手観音のみ像を憑み敬ひて、福分を願日、以て大富を得し縁」などがある。

これらの話には共通して、貧困に苦しむ人々が登場する。彼らは困窮のあまり、吉祥天、観音菩薩、千手観音など、身近にある仏や菩薩の像に救いを求める。すると、不思議にも金銭が置かれていたり、隣人や姉妹が食物を持ってきてくれたりするのだが、金銭を授けてくれたり、食物を運んできたりしたものの正体が、実は仏菩薩であったことが後になって判明する。以上のような出来事について、『日本靈異記』は、

「諒に知る、尺迦丈六の不思議の力、女人の至信の奇しき表なる事を」(『靈異記中』210頁)

「定めて知る、菩薩の感応して賜りしことを。因りて大きに財に富み、貧窮の愁を免る。是れ奇異しき事なり」(『靈異記中』124-125頁)

などと語って総括する。つまり、貧困に苦しむ人々が仏菩薩を深く信じ、救いを求めて祈願した。その結果、仏菩薩が彼らの願いに応え、「不思議の力」などと表現されるような威力を発揮し、富を授けてくれた。

『日本靈異記』にはまた、仏法の信仰によって、病から救われるという筋を持つ説話も数多く存在している。例えば、上巻第八「聾ひたる者の方広經典に帰敬しまつり、報を得て両つの耳ながら聞えし縁」には、重病のために両耳が聞こえなくなってしまう男が登場する。彼は禅師を招いて法会を行い、方広經典を読んでもらう。すると不思議なことに、禅師が方広經典のなかの菩薩の名を称える声が、片耳に聞こえてくる。そこで更に、方広經典を読んでもらうと、もう片方の耳も聞こえるようになった。

これと類似する『日本靈異記』の話は、下巻第十一「二の目盲ひたる女人の、

薬師仏の木像に帰敬して、以て現に眼を明くこと得し縁」、下巻第十二「二の目盲ひたる男の、敬みて千手観音の日摩尼手を称へて、以て現に眼を明くこと得し縁」、下巻第二十一「沙門の、一つの目眼盲ひ、金剛般若経を讀ましめて、眼を明くこと得し縁」、下巻第三十四「怨病忽に身に嬰り、之に因りて戒を受け善を行ひて以て現に病を愈すこと得し縁」などである。

これらの話には共通して、盲目の男女や、身に悪い腫物ができた女など、病に苦しむ人々が登場する。彼らは病からの救済を願って、薬師仏などの仏菩薩に祈願したり、千手観音の日摩尼手や『金剛般若経』などの経典を讀む。すると、彼らの盲目の目は開き、腫物は癒されるのだが、こうした出来事はむろん、仏法の威力によるものである。

「誠に知る、観音の徳力と盲人の深信となることを」(『靈異記下』99頁)

「般若の験力、其れ大きに高きかな。深く信じて願を発せば、願として応ぜずといふこと無きが故になり」(『靈異記下』148頁)

「実に知る、大乘の神咒の奇異しき力と、病人行者の功を積める徳となることを」(『靈異記下』233頁)

などと述べられているように、病人が深く信じて祈願したことに応じて、「観音の徳力」「般若の験力」「大乘の神咒の奇異しき力」などと呼ばれるような、仏菩薩や経典の超常的な威力が発揮される。その結果、病の治癒という奇跡が起こるのである。

この他にも、下巻第二十五「大海に漂流して、敬して尺迦仏のみ名を称へ、命を全くすること得し縁」、下巻第三十二「網を用ひて漁せし夫の、海中の難に値ひ、妙見菩薩を憑み願ひて、命を全くすること得し縁」では、海で漂流した漁師が、釈迦仏や妙見菩薩に助けを求めることによって陸地に辿りつく。

上巻第六「観音菩薩を憑み念ぜしに憑りて、現報を得し縁」では、橋を渡れず立ち往生していた者が、観音菩薩を心に念じた結果、河を渡ることができた。また、上巻第十七「兵災に遭ひて、観音菩薩の像を信敬したてまつり、現報を得し縁」では、兵士たちが観音菩薩に祈願することで、戦地の唐から帰国することができた。

さらに、上巻第三十二「三宝に帰信して衆僧を欽仰し、誦経せしめて、現報を得し縁」、下巻第七「観音の木像の助を被りて、王難を免れし縁」では、罪を得て処刑されそうになった者たちが、丈六の仏像に祈願して読経し、あるいは観音菩薩を敬うことで処刑を免れる。これらの話においても、

「海中難多しと雖も、命を全くし身を存めしは、寔に尺迦如来の威徳なり、海

中に漂へる人の深信なり」(『靈異記下』177頁)

「蓋し是れ観音の力にして、信心之を至せるならむ」(『靈異記上』124頁)

などと語られているように、苦難に陥った人々は、仏法を深く信じることによって、仏法の威力(具体的には「尺迦如来の威徳」「観音の力」など)を被っている。その結果、彼らは苦難から救い出され、安樂を得ることができたのである。

以上の仏法信仰に関する説話は、いずれも仏法を信仰する者が、仏法の威力を被ることで苦難から救われ、幸福をもたらされるということを主題としている。1, 2, 3章で挙げた説話で示されていたのは、仏法とは現に超常的威力を持つものであるということであった。そうした威力とは要するに、生き物に幸福をもたらすためのものであると考えられていることが、これらの説話を見ることによって明らかである。

仏法を信じることによって、人間は仏法の幸福をもたらす力を被り、その加護に与ることができる。その結果、人間をはじめとした生き物の境遇は安樂なものになる。すでに述べたように、仏法を信じることは、『日本靈異記』において善行と見なされる行為である。善行は具体的に言えば、仏菩薩に対する祈願、称名、供養、また經典の書写、読誦、制戒の実践などであるが、これらの行為は、幸福をもたらす超常的な力に与るための方法なのであった。それゆえに、善因を行うのであれば、仏法の威力によって幸福、つまり善果がもたらされることになる。

6、仏法への不信

それでは、善行を行うのとは逆に、仏法を信じないのなら、どうなるのだろうか。仏法を信じないということは、『日本靈異記』においては、悪行と見なされる行為であった。このような行為とは具体的には、仏菩薩の像や仏塔を破壊し、經典を敬わず、仏が戒める殺生、偷盜、邪淫、不孝、不正な取引などを行い、仏法に帰依する僧を迫害するなどの行いである。

これらの行為を行うことによって、当然のことながら仏法の威力を被ることはできない。しかし、『日本靈異記』において、幸福は仏法の威力と密接に結びつくものと考えられている。つまり、生き物の幸福は仏法によってのみもたらされるものである。

悪行によって、そのような仏法の威力から離反していくのであるから、仏法

を信じない者に対しては、幸福が訪れることはない。したがって、悪因を作ることによってもたらされる結果とは、様々な苦難、つまりは悪果でしかない⁸。

上に挙げた説話の『日本靈異記』の登場人物たちは、それぞれ貧困や病、海難などの苦難に悩まされていた。彼らの陥った苦難も実は、仏法を信じず、その威力に与らなかったがために、出会うことになったものであると、『日本靈異記』では考えられている。例えば、中巻第二十八「極めて窮れる女の、尺迦の丈六仏に福分を願ひ、奇しき表を示して、以て現に大福を得し縁」の主人公である女性は、

「極めて窮りて、命を活くるに由無くして餓ゑたり」(『靈異記中』208頁)

というほどに困窮している。しかし、このような困窮は、単なる不運によるものではない。困窮に苦しむ人物が登場する説話には、

「我、昔世福因を修せず。現身に貧窮の報を受け取る」(『靈異記中』209頁)

「我、先の世に貧窮の因を殖ゑて、今窮報を受く」(『靈異記中』124頁)

など述べる箇所が存在する。つまり、現在の自らを苦しめる貧困は、過去世に自分が行った行為を原因とするものである。そして、その過去世の行為とは、福因を行わなかったこと、あるいは貧窮の因を行ったことであるという。

福因とは善行を意味しており、具体的には仏法を信じ行うことである。だから、「福因を修せず」とは、仏法を信じず、行わないということである。次に、「貧窮の因を殖ゑ」とは、貧窮の原因を作るということであるが、これは内容的には「福因を修せず」ということに等しい。要するに、仏法を信じず、行わなかったという過去世の自己の行状、つまり過去の悪行が、現在の貧窮の原因となったのである。

これと同様の考え方は、病に対しても見ることができる。例えば、上巻第八「聾ひたる者の方広經典に帰敬しまつり、報を得て両つの耳ながら聞えし縁」には、病気によって耳が聞こえなくなった人が、

「宿業の招く所なり。但に現報のみには非じ」(『靈異記上』89頁)

⁸ 『日本靈異記』には仏法以外にも、超常的な威力を発揮するものが存在する。例えば、中巻第五「漢神の祟りに依り牛を殺して祭り、又放生の善を修して、以て現に善惡の報を得し縁」には、漢神が登場して祟りを起こす。この漢神を祭るために、富者は毎年牛を殺して漢神を祭ったのだが、そのような行為は結局、幸福に結びつくことはなかった。この人は殺生によって病になったうえ、自分が殺した牛たちの怨みを買って害されそうになる。彼を救ったのは結局、放生という仏法にかなう行いであった。このように、『日本靈異記』には、漢神などという超常的な威力を発揮するものが仏法以外に登場するにしても、幸福に結びつくのは、仏法の威力のみなのである。

と思う箇所がある。ここでこの人は、自身の病の苦しみの原因は、宿業、つまり自分が過去世に行った行為であると考えている。この宿業の具体的な内容もまた、仏法を信じず行うことがなかった、ということ以外にないだろう。そうした過去世の望ましからぬ悪行が、病によって、いわば露呈したのであるから、病にかかった人は、自身の身を「日に夜に恥ぢ悲し」(『靈異記下』148頁)むという態度を見せることもある。

なお、仏法を信じない悪行によって、今生のうちに苦難の結果が生ずる場合も、『日本靈異記』にはいくつも記されている。例えば、下巻第二十五「大海に漂流して、敬して尺迦仏のみ名を称へ、命を全くすること得し縁」では、海難にみまわれた漁師が一命を取り留めた後、

「殺生の人に従ひて、苦を受くること量無し」(『靈異記下』176頁)

と述べる。この人は、漁師として殺生を行ってきたことが、自らの漂流の原因であると考えている。なぜならば、仏教の戒律には不殺生戒があり、生き物を殺すことを戒めている。したがって、生き物を殺すことは、仏法に背く悪い行いである。このような悪行を現に行っていたことによって、今生のうちに漂流の苦しみを受けたというのだ。

既に述べたように、仏法は苦難を除き、幸福をもたらす威力を持つものである。こうした威力は、例えば、

「唯し衆僧に一搏の食を資施するときには、善を修する福の於に、来るべき飢饉の災に逢はざらむ。苦み頼みて一日不殺の戒を持するときには、道を行ずる力に於て末劫刀兵の怨に値はざらむ」(『靈異記下』24頁)

などと表現されている。布施の行は、一握りの食物を僧に施すだけでも、その善行の力によって飢饉の災いから免れることができる。仏法の不殺生戒は、一日受持するだけでも、その善行を行った力によって、未来永劫刀兵の災いにあわないようになる。このように、布施や持戒などの仏法を実践し、その威力に与ることによって、人間には富や安穩などの幸福の結果がもたらされる。

だが、もしも布施や持戒を行わないのであれば、その者に幸福は訪れない。下巻第二十五「大海に漂流して、敬して尺迦仏のみ名を称へ、命を全くすること得し縁」に登場する漁師は、魚を捕る仕事に従事していたために、不殺生戒を破らざるを得なかった。そのような行為の結果として、彼に安穩は訪れず、かえって漂流の苦しみにあうことになった。

また、中巻第二十八「極めて窮れる女の、尺迦の丈六仏に福分を願ひ、奇しき表を示して、以て現に大福を得し縁」に登場する女は、過去世に布施の行を

行わなかった。そのため、彼女に富はもたらされず、飢え苦しむ困窮に陥ることになった。

『日本靈異記』の著者自身もまた、自らの境遇について、

「昼も復餓ゑ寒ゆ。夜も復餓ゑ寒ゆ。我、先の世に布施の行を修行せずありき。鄙なるかな我が心。微しきかな我が行」(『靈異記下』271頁)

と述懐している。彼は今現に貧困の状態にあり、昼も夜も飢えて凍えている。このような状況は、前世に布施の行を行わなかった結果であるとして、彼は自身の心の卑しさと修行の乏しさを嘆いているのだ。

このように、『日本靈異記』の著者にとって、仏法とは超常的威力を持つものであり、この威力に与ることのみが幸福を招く唯一の道であった。その道から外れるならば、人間はいかに行為しても苦難に出あうより他にない。そのため、彼にとって、仏法への不信を改め、信心を起こすことが極めて重要であった。なぜならば、それは仏法の威力を受けず、苦難へ至るありようから、仏法の威力を被って、幸福へ至るありようへと転じることだからである。

7、僧について

以上のように、『日本靈異記』の最も主要なテーマとは、苦難を除き幸福をもたらす仏法の超常的な威力の存在と、その力に与る生き方であると言える。仏法の威力に与るという事態は、多くの場合、善因善果の過程として語られる。つまり、仏法の行の実践による幸福の到来こそが、仏法の威力に与ることの実態である。ところで、『日本靈異記』では、仏法の威力に与るという事態が、それとは少し異なる様相を見せることもある。

『日本靈異記』には、超常的な力を発揮する仏教者がしばしば登場する。例えば、上巻第二十六「持戒の比丘の浄行を修めて、現に奇しき験力を得し縁」で語られる僧は、持戒を行うことによって超常的な力を獲得する。この僧は、病人を癒すことに巧みであり、その「験力」(『靈異記上』160頁)、つまり仏法を修したことによって得た超常的な力によって、死すべき人ですら蘇らせることができた。この僧はまた、

「楊枝を取らむとして枝に上る時に、錫杖を錫杖に立つ。互いに二つの物を用ゐ、物仆れず。鑿にて樹つるが如し」(『靈異記上』160頁)

と述べられるような、奇術ともとれるような不思議を行うこともできた。

この僧と同様に、役優婆塞も孔雀の呪法を修行したために、超常的な力を獲

得する。上巻第二十八「孔雀王の呪法を修持して異しき験力を得、以て現に仙と作りて天を飛びし縁」で語ることによれば、その力でもって彼は鬼神を使役し、自在に海の上を駆け、鳳凰のように空を飛んだ。こうした役優婆塞の活躍を語ったうえで、『日本霊異記』の著者は次のように結論する。

「誠に知る、仏法の験術広大なることを。帰依する者は必ず証得せむ」(『呂行上』168頁)

つまり、仏法の威力は広大である。仏法に帰依し、修行する者は必ずそれを獲得する。そのことが役優婆塞によって実証されているというのである。このように、『日本霊異記』において、仏法とはそれを行ずる者に、超常的な力を獲得させるものでもあった。

先ほど論じた聖徳太子や行基もまた、『日本霊異記』では、超常的な力を発揮する存在であると見なされている。なぜならば、彼らは仏菩薩の化身である。そのため、彼らが仏菩薩同様に超常的な威力を持つことは当然のことであると言える。しかし、病を癒す僧や役の優婆塞の場合は、『日本霊異記』のなかで仏菩薩の化身であるとは述べられていない。だから、彼らは普通の人間であるのだが、仏法の修行の実践によって超常的な威力を獲得し、仏菩薩に近い存在となったのである。

彼ら以外にも、超常的な威力を帯びた仏教者の姿は、『日本霊異記』に繰り返し登場する。上巻第十五「悪人の乞食の僧を逼して、現に悪報を得し縁」では、乞食する僧を打とうとした男が、僧によって呪縛される。後に、禅師に頼んで観音品を読んでもらうと、呪縛された男は自由になった。下巻第十四「千手の呪を憶持する者を拍ちて、以て現に悪死の報を得し縁」では、行者を打った者が、空に引き上げられた拳句、地面に叩きつけられて死ぬ。行者が自らを打つ者に対して、

「何の故にか大乘を持せる我を打ち辱かしむる。実に験徳有らむ。今威力を示さむ」(『霊異記下』109頁)

と宣言したとおり、この行者は「大乘」(『霊異記下』109頁)、つまり『千手経』の呪文を受持する者であった。その呪文の威力が行者の危機にあって発揮され、迫害者に死をもたらしたのである。この他、下巻第三十三「賤しき沙弥の乞食する刑なひ罰ちて、以て現に頓に悪死の報を得し縁」では、『薬師経』の十二薬叉の神名を称える沙弥が、男に打たれ脅かされたので、十二薬叉の神名を称えた。すると、その男はたちどころに倒れ伏して死んだ。

あるいは、『法華経』の持経者にまつわる一群の説話がある。上巻第十九「法

花経品を読む人を咎りて、現に口喎斜みて悪報を得し縁」、中巻第十八「法花経を読む僧を咎りて、現に口喎斜みて、悪死の報を得し縁」、下巻第二十「法花経を写し奉る女人の過失を誹りて、以て現に口喎斜みし縁」はいずれも、『法華経』を読む者、あるいは写す者を嘲ったために、口が歪んでしまったという話である。

これらの説話において、超常的な威力を持つのは人間自身というよりは、『法華経』という経典や、「千手の咒」「十二薬叉の神名」などの呪文である。経典や呪文を称え、あるいは写すことによって、これらの人々は超常的な威力の加護を受けている。このような威力が彼らを侵害する者に対して発揮され、災いをもたらしたと考えることができる。したがって、『日本霊異記』は、『法華経』の持経者をはじめ、仏法を信じ行う人について、

「当に慎みて信心すべし。彼の徳を讚すべし。其の欠を誹らざれ。大きな災いを蒙らむが故なり」(『霊異記下』145頁)

などと述べる。仏法を信じ行う人は、仏法の威力を帯びた特別な存在である。それゆえに、その人を誹ったり、迫害するようなことがあれば、大きな災いを被ることになる。だから、仏菩薩や経典を敬うのと同様に、仏法を信じ行う人も敬わなければならないと考えられているのである⁹。

結論

以上、『日本霊異記』における仏法のあり方について概観した。仏法は『日本霊異記』のなかで、仏菩薩、経典、各種の戒律や行、仏法を実践する僧から構成されている。これらのものが超常的な威力を持ち、それを発揮することで不思議な現象を引き起こす。

その仏法の威力こそが、人間をはじめとする生き物に対し、幸福をもたらし、苦難から救い上げる当のものである。生き物にとって、幸福は仏法を離れてはあり得ない。仏法とは生き物の望ましい生き方の中核にあり、その要となるものである。

仏法を信じるということは、このような超常的な威力に与ることを意味している。そのことによって、人間は現世や来世に幸福を獲得するとともに、自らもまた超常的な威力を帯びた存在となる。こうしたあり方を人々に勧め、現実に

⁹ 入部正純『日本霊異記の思想』1988年 法蔵館 55-102頁

実現していこうとすることこそ、『日本靈異記』が執筆された第一の目的である
と言えよう。